

学麻



次第

なへうたはのうへへ

下

ひくふたふりぬは是

三詩

念佛のり老ふるあふたひ

三點野よりわが方へ下向

たはたは州當麻ふまうりや

五上

おりのひふあふもぬくのうへ

紀の路乃をまゝとるぐや

三點燈の心も川渡も教あわ
朝日影よりひるりぬこくち
一と雲もうきふとをりま
二上山乃蕭ある當座のもろ
三海よりわく一念弥陀佛
四滅之量鼎た悦まじわ八万
諸法無常は阿弥陀たろく

秋を冬と
 一はちふさるゆふに南無
 阿彌陀佛と
 おもたうなわ
 仏の静けさ
 一はちふさるゆふに南無
 阿彌陀佛と
 おもたうなわ
 仏の静けさ

東乃五色ふりく見えぬ
く新や法佛の如く横くなれ
まきつ超世乃也然るも迷ひの
中まをちとよな我玉法乃雲
鳴るぬ雨相の月の教をう小
まぬ心乃り浦をや西へ電
まわ通じつや実や大乃めは

ちりきさな何さくと思ふ

末の世は迷ふおかりぬきや

悦殘可法法ハ是う一輝乃く

くをへをおきく末の

清く法傳くく少あまに

教壇乃法をよもあく道う

はよまのまひきぬの世を

すなはち乃とのめきなり出さるるを
法の場よりいはずわ御法乃
場よりいはずわ

萬古之靈

河をくぐり
足は当麻の

漢方之方
是乃

清奇ともし又當麻ともし

ツキ
あつたが池に
をのり

ひさし清く甲故に漆殿の

井中記
あまのうみ

是ハ
漆寺
ハ
池ハ
漆殿
乃

卷之五 くのほの法子見佛

中
 法
 安
 定
 心
 也

志乃喉一筋一寸不脱

南無阿弥陀佛 実の難き人乃
云葉がく形くう 弥勒一敷な形
叔みく形が形を様々の色中は
かりるくはくもぬおは葉木と
みえくわ けくは魂し
わきく形くわあまうく人の
糸をうめく けけてほき形

標本のむもん乃おはなふ葉子
糸ふくもく色王 かなく
が形くもくもくもく本國云
成佛の色あようめお花く形の
くを魂うはほひくく人く
くくく志まぬく人のくを
くくく人乃あくあ

やまがらゝゝ其正方の祢は来迎
あはゝゝおは孫も神ありー下
電一ゝ不乳ゝ親志ーたもの
志一ゝゝ母あを頼りーは
為菴をゆー覚ちり居て一向
忘佛三味のさよ入新ふ所
山松乃松ゆゝ風もけーて

ぞなりゝゝ友をまひまは乃音も
たゝゝ心身成けまひも
ひゝゝ祢必親志の本おと座祢
園月お忘乃まゝ其くゆゝあ
折角一一人のきた乃包能と
来りたゝゝいめま是ハいつな
人やゝゝとねゝあたまひー

龍尾をうへ乃たまふく龍をば
なまやなうのなまふくちちう
きたらふまをひらまきぬ
中ね外におきけし
うけなりふくともわうたも
まうぬ山中におるぬれ
とく南無阿弥陀佛のとなふ

なうてみ地もたまふ
ごんまきひようけちう
りうみなまあちちへり
きたたわとのたまふく
ねいけぬおしき生乃
ゆまうまのときふと
所よりうへぬれ乃けち

上草
ちかゝるうわふみえなまふ

きゝゝめ大所と青物持家うゝお

おへうき思ふよけきうき歌や

上
しらひも二月中乃正月

ちう女時正の時長かわ法子を

あゝんゝあゝけさゝあゝたわ

上
はりのめよまはらばうもや

うりながらは事う 上
ハハ何哉り

はゝきうきま古の化女化女乃

上
夢中り現——なるおかし

上
いひもあくひは 上
ひわさう

上
花うわ呉者意——る樂の強け

あわづしや——や接人ようま

ちてぬる山乃丘上のけとた

ト一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一
二上乃山光あうひとえい色と
、
まふちとそけいあまりのほろー山
ト一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一
かぬ故よ及上乃さけとくやなわ
ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一
老の極をのほわびかるくもふ
ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一ニ一
来るありまらわ悲雲よりきて
、
あうわらわ
し
めきほる
なもしは重了奇特をおり下せと

ふもあへはうきや那く
め音きゝえひるをさし歌聲乃
上
苦瘧のまねにあつわ歌またもの
二下
あゝ矢とらよく後上喉々暖中に
歌きくるその中水姫の精魂なわ
ト
お安楽よ有りと美祿饗満ちぬ
朝しくりたりをこころに候心

[illegible]

ふせうにひくき絲乃め者の
見佛ゆ法のづはくにけり
笑もあはれのお光の遍照十方乃
宿生をたそ西方よずり趣き
は清乃水のみなけ梓又のわに
船のぞは殿々ふまに後の方を
ほおくともなをこふきぬ



